

春燈

4 月号

April 2011



主宰の句

安立公彦

鬼やらふところに鬼を遊ばせつ

幼児のこゑに睦ぶや年の豆

帰りゆく家あるは良し日脚伸ぶ

日脚伸ぶどの木も幹に日を溜めて

残雪の峨々たる峰や画布を占む
(平山郁夫展)



成瀬櫻桃子の句

花のほかには松の松風鐘供養

『素心』昭和五十六年

日本舞踊の「京鹿の子娘道成寺」の舞台は一面の花の山で幕が開く。蛇体を隠して鐘の供養に訪れた白拍子花子は、立烏帽子を付け中啓を構えて多くの所化の居並ぶ中、「花のほかには松ばかり、暮れそめて鐘や響くらむ」と、正面雛壇に並ぶ長唄の謡いがかりに舞う姿が目につかぶ。あえて松の緑に焦点を当ててこの華麗な舞台を一層引き立てている。

佐藤信子

成瀬櫻桃子の句

なかに一つ怠け石仏うららかや

『風色』昭和四十八年

この句いかにも櫻桃子師独特で、調べもなめらかではないし、「うららかや」を下五に置いたのも適当ではないかもしれない。が、筆者はこの句、好きである。というのも、この句を読むと、目の前の師の息づかいさえ聞こえる思いで、無性になつかしくなるからである。石仏とてとくに怠けていたわけでもなからうが、師はこの時何か安息のひとつときを得られたのではなからうか。

西山 浅彦

燈下集



○ 中野あぐり

七草籠あえかに土をこぼしけり
天神に恋の絵馬あり女正月
いつも聞く鴉初声ならば佳し
御慶享く大振袖の子は二十歳(孫)
年々に賀状の増えてあたたかし

○ 小石珠子

竹爆ぜてとんどの達磨ころげ落つ
ラガー等の濃き影槍となり走り
日向ぼこはにかみの顔並びけり
全身もてあるじ待つ犬冬夕焼
紅白梅咲くや佳きことあるやうな

○ 諸戸せつ子

ぼろ市の風の痛さとなりにけり
たまさかの夫との外出帰り花
冬の蝶まだ飛ぶことを諦めず
鉢植の桜の冬芽遜色なし
冬草の青きも坂間晴子の忌

○ 井上春子

寒風の渚ペンギン列正す(南極行五句)
一列縦隊氷海目指す子ペンギン
氷河崩落厳しき音に息潜め
冬夕焼南極の雲ガツシュ絵に
耳袋最高齢者免れし

○ 大嶋 洋子

屠蘇酌むや米寿の夫と子夫婦と

早梅や庭に回りし人の声

一病のあけくれ春の待たれけり

春近し潮の香高きなまこ壁

笹子鳴く日射し明るくなりしかな

○ 太田 具隆

笥より水の勢みて日脚伸ぶ

木の幹をたびたび撫でて春を待つ

この木との縁を大事に寒肥す

水仙に乱立は無し寄り合へる

梅咲くに居合はずといふ佳日かな

○ 阿部 泰子

春を待つ焼却場の空なりけり

寒明の雲白じらと流れけり

春雨や船一つなき隅田川

空の色日ごとに青き二月かな

東京タワー余寒のネオン挿頭しけり

○ 西谷 良樹

手をつなぐジーンズの背に破魔矢立つ

寝て待てど果報届かぬ三ヶ日

公園の遊具込み合ふ三日かな

人日の込み合うてゐるやきとり屋

初出勤子の車椅子送り出す

○ 長浜 徳三

好きな詩を特筆大書初日記

病む身にも射す一条の初日かな

人日に癌の宣告妻癒えよ

己が寿命知らぬ幸せ福寿草

恋猫の戻りていまだ外の声

○ 綱 徳女

映してはならぬ恋情初鏡

星凍てて間遠になりし逢瀬かな

雪吊にゆだねし松の矜持かな

母の忌や梅一輪の庭に佇つ

春コートのかんたて無言通しけり

当月集

安立 公彦選



参道の一直線の淑気かな

お行儀を直されてをり飾海老

恵方道思はぬ方へ曲がりけり

真つ青な空一聯の寒さかな

何といふ事も無けれど春隣

○ 矢口笑子

待春や予定なき日も薄化粧

風のたび影の膨らむ寒雀

梅東風や轟く絵馬を均す風

薄氷の指先にあるいのちかな

寒明くる白き水吐く大水車

○ 小山繁子

○ 横山さくら

ランドセル色とりどりに春隣

寒稽古重たき門を開けにけり

水仙の香り残しし飾り棚

大根を刻む手太くなりしかな

春小袖挨拶少し改まる

○ 小淵二美江

○ 和田絢子

年の瀬や外灯に寄りメール読む

開拓碑据わる里宮年迎ふ

海近き街の明るさ初御空

積み上ぐる土白じらと寒の入

天鵞絨の服に日の斑や松明るる

子規庵の隠れ家めいて路地小春（根岸二句）

枯へちま子規の日記の伊予訛

日向ぼこしているやうに父母の墓

孫産れて初絵馬納む根津神社

俎始なまくら包丁はげまして

春燈の句

安立 公彦選

朽ちゆくもの愛しや庭の土凍てて

千葉 金森 涼

霜柱踏むや大地の泣く声す

大寒や座せば話のながくなり

大寒の土踏まへ立つ一樹かな

紅梅や風のすぎゆく盆の窪

父と決め仰ぐやあはき春の星

転ぶなと主治医のことばあたたかし

梅林やうすくれなぬの風のいろ

手にうけて臘梅を透く光の斑

毬歌も民話もとほし良寛忌

幽、明に遊びほうけて虎落笛

余生ふと思ふともなく紙鳶

冬麗や差しのべくれし見えざる手

八十路目ざしペダルを踏める寒の入

神奈川 河本由紀子

東京 齋藤 晴夫

埼玉 中里よし子

見詰めぬて見入りて春を見つけけり

何するも掛け声大き目永かな

とんど焚く友水軍の末裔なり

水仙やぴんとはりたる猫の耳

白梅の手囲ひの香や風の中

一瞬の眼鏡にうつる初蝶なり

なみだ癖かくす寒紅ひきにけり

春立つや花のあふるる師の墓前（祐天寺三句）

鸛なくや墓前に誓ひ願ふこと

文字なぞる師の句碑梅の咲き初むる

人日や身のうちさらすレントゲン

皇居マラソン松青々と寒日和

ボルシチの鍋沸々と寒波来る

セピア色の家族写真や冬帽子

東京 豊谷ゆき江

神奈川 浅木 ノエ

千葉 海村 禮子



余言

安立公彦

言えよう。折からその松に差す初春の光に彩られて、初神楽も作者もしばし神とともに在るのだ。格調の高い作品である。

春さむき貝殻道をとほりけり

本多 游子

昭和六十三年七月二十一日、安住敦先生の春燈社葬が、目黒祐天寺で執り行われた。游子さんは当時祐天寺の住職を兼ねていたため葬儀の導師を勤め、当日は五名の脇僧を従えて入場した。先生の戒名も氏の発意による。

平成六年六月、祐天寺境内に安住敦第一句碑建立の際も氏のご尽力は大きかった。また自らは游子さんの本寺である取手市本願寺に、安住敦第二句碑を建立。平成十二年十一月のことだった。なかなか出来ることではない。

この句、淡々とした表現の中に、来し方を顧みる思いがさりげ無く出ている。

水餅の甕の底より母の声

松橋 利雄

私ごとで恐縮だが、子供の頃郷里では餅は全て丸餅だった。御供えなど厚めのもは松が造ぎると甕に漬け込む。旧正月になると、薄暗い台所で、母がその水餅を甕から取り出して俎の上で割っているのをよく見かけた。

この句、「甕の底より」に何とも言えぬ懐かしさがある。土地の習俗と言っべきか。ローカルカラーなどと言っ葉

影向の松に日の差す初神楽

佐藤 信子

「影向」は「ようごう」、神仏の来臨を意味する。

五年ほど前、房洋句会の吟行で、上総の奥地にある鶴峯神社の神楽を見に行ったことがあった。延々と続く舞人の動きと、それを誘う単調な舞曲に見入っているうち、いつしかその単調さに引きこまれる思いがした。この神楽はいわゆる里神楽だ。

歳時記では里神楽に対し、皇室や皇居との関連の深い神社で神を祀るために奏するものを御神楽と言ふとある。かぐらは神座（かみくら）の略。神座は神霊の宿る容れもののごとく、榊や松などはその神座の一つであると記されている。この句の「影向の松」はまさしく神楽の本意を表現したものと

では包み切れない、それはまぎれもない文化である。

きれいごと並べて年を迎へけり 三上 程子

こういう句を見ると立ち止り、しばらく考える。新年を迎えるということは目出たいことである、と古来伝承されてきた。しかし大方の大人は、その伝承を習慣としてしか受け取って来なかった。それは、へ目出度さもちう位なりおらが春一茶」を見るまでもないこと。

この句の「きれいごと」は人に向かつての言でなく、マスマディアへの皮肉であり、同時に己への呟きでもある。

映してはならぬ恋情初鏡 綱 徳女

ぼつぺんの呼びもどしたき人へ鳴る 三宅 文子
埋火や古稀には古稀の恋ころ 久保 久子

今年の新年大会では「恋」の句が注目された。ここに上げた三句、それぞれ内容を異にするが共通するものは思いである。三句とも女流の作というのも佳い。「恋」の句は年齢に拘らずもつとあつてよい。

徳女さんの己を律する恋情は初鏡に向けての思い故、切実さが一層迫ってくる。しかし初鏡はその恋情を忠実に映し出す。本来こういう句は鑑賞など蛇足と言つべきだ。

文子さんの句は少女の頃の回想か。人はそれを片恋と言つ。憧れごころを「呼びもどしたき人へ鳴る」としたのはまこと

的確である。

久子さんの句、「古稀には古稀の恋ごころ」が現代的だ。しかしその恋ごころを、「ごころ」という思いに止めているのがこの句の眼目である。「埋火」の季語もい。

姐始なまくら包丁はげまして 和田 絢子

この句を見る人、それが男であれば、「なまくら包丁」に目が行くだろう。なまくらは「鈍」である。鈍の反対は「鋭」。自らを鈍と取るか鋭ととるか。鈍の方が人間があつていいという人は多いだろう。さらにこの句、「はげまして」がいい。このはげましてには、作者の「なまくら包丁」に対する愛情がこめられている。

風なりに氷柱の曲がる漁師町 中村紀美子

この句を見ていると例えは犬吠埼の外川を思う。この漁港に沿った漁師町には、終日太平洋の強風が吹き抜ける。「氷柱の曲がる」とあつてもそれは多分に視覚的なものと思つたが、この地の風の荒さを考えると頷ける。へ山風は氷柱を曲げてしまひけり 余子」という句もある。

この句、しかし良く見ている。対象を見ると言つても、心にその対象を受け入れる備えがなくては、見ようと思つものも見えて来ない。その「受け入れる備え」は、無私のごころ、或いは没頭と言つても善い。